

諺
州

五之六
止

自
安
屋
寸



諺算卷之六

安 第三十四

諺

麻につる蓬

荀子勸學篇曰蓬生麻中不扶而

直孟子滕文公下篇正義云諺云白沙在泥不染自黑蓬生麻中不扶自直○大戴禮云蓬生麻

中不扶自直白沙在泥與之皆黑史記三王世家亦有此語新考

家集云つる蓬をさへもまきしるものさけあさゆの草

ま本古一とて麻のよりさハハふを以てまれてもけん地色のつる

新考世中の麻ありてくりくりするものゆりのよりさのして

惡事千里北夢瑣言曰好事不出門惡事傳千里

惡事身にゆる春秋傳云善善長惡惡短惡惡止

其身善善及子孫新考

怨ハ恩で報せよ老子經云報怨以德讀えよかづり

仰で唾く四十二章經曰惡人欲害賢者仰天而

唾唾不汚天還汚已面讀えよ



青^{アホ}さハ藍^{アイ}より出て藍^{アイ}より青^{アホ} 古の字の初^アとく

網^{アミ}りくして洲^{シマ}をわき 抱^ア扑^ア子^ア曰^ア夫^ア不^ア學^ア而^ア來^ア知^ア猶^ア

願^ア魚^ア而^ア無^ア網^ア焉^ア心^ア雖^ア勤^ア而^ア無^ア獲^ア矣^ア漢^ア書^ア曰^ア臨^ア困^ア而^ア

飴^ア祿^ア不^ア如^ア退^ア而^ア結^ア網^ア也^ア小^ア浪^アの出^アる也^ア

其^ア言^ア而^ア陰^ア陷^ア之^ア俗^ア語^アのき^アり^アけ^アり

あ^アハ^ア別^アの^ア始^ア 佛^ア書^アに^ア會^ア者^ア定^ア離^ア以^ア況^ア何^アり^アと^アより

頭^ア剃^アより^ア心^アと^アそれ 六道^ア講^ア式^ア云^ア適^ア剃^ア頂^ア不^ア剃^ア心^ア染^ア衣^ア

不^ア染^ア心^ア可^ア取^ア恥^ア 俗^ア語^アのき^アり^アけ^アり^ア

秋^{アキ}茄子^{アキ}新^{アキ}婦^{アキ}は^{アキ}く^{アキ}く^{アキ}と^{アキ}る^{アキ}か^{アキ}秋^{アキ}よ^{アキ}新^{アキ}考^{アキ}

網^{アミ}の目^{アミ}の風^{アミ}は^{アミ}す^{アミ}く^{アミ}は^{アミ}秋^{アキ}よ^{アキ}新^{アキ}考^{アキ}

俗^ア語^ア天^ア晴^ア 舊^ア事^ア紀^アの^ア初^アり^ア之^ア也^ア汗^ア天^ア窟^アより^ア出^アる^ア時^ア

阿^ア那^ア 舊^ア事^ア紀^アの^ア初^アり^ア之^ア也^ア汗^ア天^ア窟^アより^ア出^アる^ア時^ア

阿^ア痛^ア 俗^アの^ア痛^アじ^アの^ア初^アり^ア之^ア也^ア汗^ア天^ア窟^アより^ア出^アる^ア時^ア

阿^ア痛^ア 俗^アの^ア痛^アじ^アの^ア初^アり^ア之^ア也^ア汗^ア天^ア窟^アより^ア出^アる^ア時^ア

難^ア有^ア 汰^ア華^ア經^ア文^ア珠^ア師^ア利^ア白^ア佛^ア言^ア世^ア尊^ア是^ア諸^ア菩^ア薩^ア甚^ア

難^ア有^ア 汰^ア華^ア經^ア文^ア珠^ア師^ア利^ア白^ア佛^ア言^ア世^ア尊^ア是^ア諸^ア菩^ア薩^ア甚^ア

後世の消息の末、穴燂とかくいそせりなりとめて
書翰の終は自審保審自愛至祝
珍重なりと書けり。又不よりて穴燂てと云然と
多し。又女の所よりよりくも穴燂この略語な
る。今按ふ舊る紀云後、半の甚切なりとあると云又
日本紀、可畏の字とあり。こと訓せり。あがり。こと云
は甚可畏と云本、とて今書札の終、必怪とかくと
因之なり。ん穴燂と云ハ、燂流なり。

安堵 史記高祖紀諸吏人皆案堵如故通鑑集覽
應劭云喻人皆安然如堵堵之不遷動也漢書作

按堵師古云言不遷動也
周章 文選靈光殿賦俯仰顧盼東西周章註顧盼

周章言驚視也孔子家語五儀篇周章遠望字彙
怔營貌怔營不安之貌 汰華經云周悼惶怖也ホの流

よれをあらはつる哉なり

愛敬 俗語より愛敬ハ佛者の言よむつなり。儒家の

祝よ実あり

求食 弟茶集の訓也。文選司馬遷書搖尾而求食

汰華經處處求食。下字集よ曰名の食と求ると求
食と云。蓋日本の俗の世語也

本云、と云あれぬをとありなり。さういひある山のたより。

能因が沈く、物人の心つものさるといあきりすと云。

徒然草よりぬおもく、山政あされとさうりせり。と
あり。山よても海よても今よとものよと求るといあるよ

かき、ん求食と云とて、下節に現はあづると云
あせると云ハ求食なり。

浅増 又ハ有増とも書。粗と云さうり。後の俗語也
浅増 乞又傍の供治なり。古款。

あやゆやのりんゆきもあやゆきもよふあやゆきも
愛立 俗に恩老のふあきと也之なり云書經伊訓立
愛惟親立敬惟長始干家邦終干四海也教の之
事存より始りて也此のこゝに約すは四海皆同胞なり
不仁にして也相をさしと也之のあきと也なりぬるこゝにあ
らば源氏雲の老よも也とてなりきし事とすしとあり
無安倍 抱の脆き事なり竹石抱石よ安倍多と云も
の結夜始はめぞく大氣は皮と平なりぬるこゝに
けりより安倍なりと云ふはさあらんとあり源氏後
合をくあ後多ぐちぐれこも子と云てく大氣のお
のこ片阿きこもいといふなり折よこのあ
かにも安倍なりとあり河海無教字と用ゆ
安否 礼記文王世子よ出たり
安排 莊子曰仲尼謂顔回曰安排而公化乃入於

寥天一郭象曰安於推移而與化俱去故乃入於
寂寥而與天惟一也類書纂要云安排字出國語
排定也人生窮達禍福皆已定矣我但安其所排
隨造化而去也
踧 班固東都賦馬踧餘足註踧屈也古來のぐと

相對 王文考靈苑殿賦聽而相對
無狀 史記夏本紀鯀之治水無狀索隱云言無功狀
分野 下学集よ分野ハ五極の成なり日本天台宗
以續智也弘決第一其地分野ともあり文選魏都
賦列宿分其野二十八宿四方よ配して九州あはく
司星紀あり是と分野と云ふやとありふゆとも

浮岩 古今集の歌よ

左遷 史記韓信傳に出たり。漢書張蒼傳註師古云。

是時尊右而卑左故敗秩為左遷

在所 漢書平帝紀に出たり

掃除 周礼夏官に出たり 除とちれきよむ事

沙汰 杜子美上韋左相詩沙汰江河濁集註云沙

汰以節貯沙汰其細而存其大曰沙汰の意は飛

分のよき事沙と汰と細なりと去るなりとさびる

やよする事也沙汰とも記此とみぬ所也俗は流汰

と云く沙汰とあるは誤なり

流石 晋孫楚隱居せんと欲して王濟は濁く齒は石

と枕し流は漱んとせんと欲して王濟は濁く齒は石

と漱へくは孫楚の流は石と枕するは耳に洗えんと欲す

漱は石と厲人と欲し 蒙來の孫楚漱石とあり 乞流と云

一き答あり。うとみて志のい。さ事とささかると云と

或流よりう。ささかるとい。流石と用てさす

此は事とす。い。流石と用てさす

不祥 日本紀の不祥の字とささかると云と

うと事と云。又悪の字とささかると云と

中のさかるとい。人のさかるとい。悪の字也

澤女澤女鳴 神代下帝沢女命のり。口訣云山神也澤多

也直指抄に云今の人は流汰と云と云と云と云

在在處處 劉禹錫詩在在處處神物護持

催促 杜子美詩走平乱世相催促

三千世界 法華經云三千世界

彷彿 楚辭悲回風篇云存彷彿而不見朱子註謂形

似也

前驅 詩經伯也執以又為王前驅又先驅の字とも用。史

記司馬相如傳相如至蜀縣令負弩先驅
相違 左傳云非相違也而相從也陶淵明集世與

我而相違杜詩嬾朝真與世相違
三從 儀禮喪服篇云婦人有三從之義無專用之

道故未嫁從父既嫁從夫夫死從子從之教令
後方深氏有袴よ女ハ之ハ坊よものハ之ハあるハ
五障三從と云つて此れハ入障と云半ハ法華經に出て

鑽仰 論語子罕篇云顔淵喟然嘆曰仰之彌高鑽

之彌堅鑽仰と云半これハおつせり
三昧 名義集曰三昧此曰調直定又云正定遠法師

曰夫稱三昧者何專思寂想之謂也琅琊代醉編曰

道家云貞一儒者云致一釋氏云三昧其義通也類

書纂要云得妙處曰得三昧國史曰長沙僧懷素自

言得草書三昧俗ハ他意を以テ半と云
相好 佛氏三十二相八十種好乃記有り法苑珠

林千佛篇ハ現相部と云
三業 佛氏身口意の之と三業と云俗ハ善ふひ

そしと云ハ潜之業也
三寶 孟子諸侯之寶三土地人民政事也俗家の老

子我有三寶一曰慈二曰儉三曰不為天下先慈

故能勇儉故能廣不敢為天下先故能成器長道

家ハ佛法僧と云く之寶と云俗家の説者云有り
と云ハ土地人民政事と云くんバ人世一日と云くハ

草創 論語子曰為命禘謀草創之註草畧也創
造也謂造為草藁也今地の始ハ半と草創と云

左道 サダウ 礼記王制より註左道謂邪道漢書王商傳註左道僻左之道謂不正也人道ハ右と云ふを云ふは^{ユウ}ヨウとハ左道と云ふ^{サダウ}ヨウヨウハ^{サダウ}ヨウヨウと云ふ

左禮 俗に礼と云ふる^{キョウ}キョウと云ふ^{キョウ}キョウと云ふ^{キョウ}キョウと云ふ

無 ム 俗に無と云ふは^ムムと云ふは^ムムと云ふは^ムムと云ふは

候 サウ 釋名候護也。伺候諸事也。俗書ヨウ末必候

息と云ふ人の^{サウ}サウと云ふは^{サウ}サウと云ふは^{サウ}サウと云ふは

かくハ礼なり。人ヨクヨク命と云ひくまハ

草豪 史記屈原傳及漢書孔光傳より。日本

曰草草叙之本也

皆悉 万葉の續より。そのまこと云ふは

これともいふと云ふは

耳言 蘇紫の讀より。耳語と云ふは

相場 韓信傳より。賣買の光然と相場と云ふは

場ハ市場也。市場の利日くお易る故に場と稱す。

て徳と定むるは場と云

纂考 俗ハ均と云り考らると云へりす。云はき也。

作法 左氏襄公傳云。君子在位可畏。施舍可愛。進

退可度。周旋可則。容止可觀。作事可法。

才幹 晉書云。有當世才幹。

後漢書。先帝早世。

再三 易經に云り。

造作 蜀都賦。造作者以為程。是造り他のこと也。今

俗ハ人の意。賦ハ於る事と云。造作ハ造りて云ハ

之云々云々ハ

參會 漢書韓持國傳に云り。師古云。三人相遇

故曰參會。今俗ハハまじりあふと云。或を用て

懺悔 圓覺經疏具云。懺悔此言悔過。梁武帝詩

蘭湯浴身垢懺悔淨心靈

者 廣韻云。凡非穀而食者曰者。或作餽。通作教。

今俗ハハ海味の事との者と云。りり。廣韻

の注に云く。なれの孰魚菜蔬たると云。

相應 嵇康養生論云。凡所食之氣。蒸性染身。莫

不相應。

慚愧 增一阿含經云。佛告諸比丘。世有二妙法。擁

護世間。所謂有慚有愧也。諸比丘。若無此二法。世

間則不別。父母兄弟。妻子知識。尊長大小。即與畜

類同等也。是故比丘當習有慚有愧。

鬆 抄のりらと半と云く。みと云ハ字也。損軒云。字

書髮亂貌。今案群書之中。稱輕鬆者多矣。如

土地輕鬆食品輕鬆木理輕鬆是也蓋輕軟易分決之意今倭語所謂裂是也

正譌

座興

一舟の興くさるる

草履

草履

閑寂

閑寂

下墨

物と汗海して下墨と下墨して下墨と云ふ色を墨と云ふは誤

左礼言

左礼と云ふは左と云ふは誤

珊瑚樹

珊瑚樹

鯁

鯁

雜喉

雜喉

貨布

貨布

豆

豆

三結

三結

幾 第三十六

諺

金言耳の逆

說苑正諫篇孔子曰良藥苦

於口利於病忠言逆於耳利於行家語六本篇

兄弟ハ雨の手の如後漢書云語曰兄弟左右

手也又晉書邵續傳云兄弟如左右手

君ハ舟臣ハ水荀子曰君者舟也庶人者水也水則

載舟水則覆舟孔子家語曰夫君君者舟也庶

人者水也水所以載舟亦所以覆舟

槿花一日の榮東方朔與公孫弘書云木槿夕死

朝榮士亦不長貧也白樂天詩槿花一日自為榮

狂人走まを不狂人と走る淮南子曰狂者東走逐

者東走東走則同所以東走則異

戰國策云蘇子說齊閔王曰語曰麒麟之衰也駕

馬先之。又燕田光曰。臣聞。騏驎盛壯之時。一日而馳

千里。至其衰也。駑馬先之。

九牛一毛 前漢書司馬遷傳云。假令僕伏法受誅。

若九牛一毛。

狽 虎の威とる。戰國策云。荆宣王問群臣曰。吾

聞北方之畏昭奚恤也。果誠何如。群臣莫對。江乙

對曰。虎求百獸食之。得狐。狐曰。子無敢食我也。天

帝使我長百獸。今子食我。是逆天帝命也。子以我

為不信。吾為子先行。子隨我。後觀百獸之見我。而

敢不走乎。虎以為然。故遂與之行。獸見之。皆走。虎

不知獸畏己而走也。以為畏狐也。今王之地方五

千里。帶甲百万。而專屬之。昭奚恤故北方之畏奚

恤也。其實畏王之甲兵也。猶百獸之畏虎也。

錐 史記平原君傳云。平原君合

從于楚。得食客十九人。毛遂自薦曰。臣得如錐之

處囊中。乃脫穎而公。非特末見而已。新考。

急急如律令 資暇錄云。符祝之類。末句急急如律

令者。人以為如飲酒之律令。速去不得滯也。一說

漢朝每下行之書。皆云如律令。言非律非令之文。

書行下當亦如律令。故符祝有如律令之言。按律

令之。令宜平聲。讀為零。律令是雷邊。捷鬼。此鬼善

走。與雷相疾。速故云如此鬼之疾走也。新考。柳文四

今日本に巫覡の符章よく書事也。

十一卷 祭壽縣文。福牙文等の末小

急急如律令の文字と用ゆ。

魏蕩蕩。論語泰伯篇にけり。註。魏々。高大之

貌。蕩々。廣遠之称也。今俗。地の高々と魏々

蕩々。と云ふ。此れけり。新考。

きのふもやふれびり。

三三三 北齊書

肝大 修小廣量 乃志と肝の大志と云。靈樞論勇篇。

又肝の大志と云ふると覽大篇上壇ものといはれし。

京風 修小のちびり半と京風と云。詞の類あり。

名文物之所聚。故其士女雍容閑雅之態。生今諺。

云京樣。即古之所謂都相如傳。車從甚。都是也。

邪許 詩經伐木篇。朱傳云。淮南子曰。舉大木者呼。

邪許。蓋舉重勸力之歌也。日本も大木を呼ぶ。

行列 礼記行其綴兆。要其節奏。行列得王焉。進。

禁密 宋高元裕傳。兄弟處禁密。時人榮之。

氣既 杜子美詩。交親氣既中。類書纂要云。志氣。

節既也。杜子美詩。安時歌。吉祥。

吉祥 杜子美詩。溪行衣自濕。亭午氣始散。是ハ。

蓄縮 漢書江充傳。丞相王嘉健而蓄縮。不可用。註。

記憶 廣韻。憶思也。念也。增韻。記也。北齊書。陳元。

これと云ん。湯氏探らば奇と歎く。抑せらる。
これと云ん。大抵は湯氏探らば奇と歎く。抑せらる。
字と云ひ。ひと云ひ。起請の字。所より。後漢書。劉盆
子傳云。其餘不知書者。起請之。註云。請其書。已名也。
起請の字。ひと云ひ。ひと云ひ。

急難 詩經常棊篇云。兄弟急難
斷 本の勢。ひと云ひ。用。莊子云。百年之木。破

而為犧樽。青黃而文之。其斷在溝中。比犧樽於溝中
之斷。則美惡有間矣。

禁斷 朱子文集曰。吏監禁斷

境界 朱子文集云。自家境界

暖 廣韻云。暖。大笑也。字彙。極虐切。音喙。俗。小
大。笑。丁。事。と云ひ。暖。れ。云。あ。や。ま。り。也。

休息 詩經周南及月令より。又体足乃字ハ後

漢書 杜詩傳よりあり

汚穢 神代卷よりあり

聞蕩 太平記よりあり

祈禱 張平子思玄賦。蠲體以祈禱

勤役 袁陽源詩。勤役未云已。壯年徒為空

禁當 杜子美春水生詩。一夜水高二尺強。數日不

可更禁當。趙註云。禁當。蜀之俗語。の禁當と云ハ

れ。え。あ。ら。り。と云也。今修。の。ま。り。と云。本。と云ん

禁固 文選曹子建求通親表より。注善曰。左氏

傳申公巫臣奔晉。子反請以重幣錮之。杜預曰。禁固。勿

仕也。錮與固通。漢書武帝紀。諸禁錮及有過者。謂重繫

後漢書。黨調傳。禁錮終身。

氣色 キセキ 文選謝惠連詩蕭條洲渚際氣色少諧 シ 祖庭事苑云龜所以決疑鏡所以辨物 ハ

灼て教と決するものあり ハ 後を照して物と辨るもの ハ 有り人のあひ定規 チ として急澄 ト も ニ

器用 キヨウ 左傳 ハ 出 テ 定公九年傳注器用者謂物之成器

可為人用者也王子淵得賢臣頌夫賢者國家之器用也人と思ふ以て事ハ治る長篇 ト して ハ 用 ト 也

較量 キヤウリヤウ 較ハ音カウ今誤 ス 尺 ハ 用 ニ 寸 ハ ありと ハ 用 ト 也 邵子詩云

豈待較量然後見

正譌 シヤウロ 奇 キ 怪 クワイ ハ 昨日 キノケ 著物 キモノ 金襴 キンラン

ハ 誤 ス 吉相 キツサウ 去 ハ ぬ ル あり ハ 誤 ス 行 キヤウ 任 ニ 坐 ニ 臥 ス ハ 佛志 ハクシ ハ 威 ニ 儀 ト あり ハ 誤 ス

由 第三十七

諺 チヤウ 弓 ユミ と 矢 マサ 納 ナク 詩經周頌曰明昭有周式序 テ

位 イ 載 ニ 戢 ニ 于 ニ 戈 ト 載 ニ 虞 ト 系 ト 弓 ト 矢 ト 也 ト 引 ニ 後 ト 也

弓折 ユミマゼ 矢盡 マサツク 弔古戰場文云鼓衰兮力盡矢竭兮弦絶

俗語 クノコトワザ 遺言 ユイゴン 左傳哀公三年傳 ハ 出 テ 引 ニ

由來 ユライ 易繫辭 ハ 出 テ 引 ニ

猶與 ユウヨ 曲禮 ハ 出 テ 引 ニ 疏曰說文猶獸名與亦獸名二物皆進

退多疑人之多疑惑者似之故謂之猶與楚辭 ハ 猶 ハ 豫 ハ 麋 ハ 字 ト 周 ハ 漢書呂后紀注師古云猶獸名爾雅曰猶如鹿

善登木此獸性多疑慮常居山中忽聞有聲即恐有人且來害之每豫上樹久之無人然後敢下復史又上如

油斷 ユ 唯一 イチ 故 ニ 決 セ 者 ヲ 林 ハ 猶 ハ 豫 ハ 焉

首楞嚴經云 ハ 一 ハ 精 ハ 眞 ハ 也 涅槃經第二十二云 ハ 譬 ハ 如 ハ 世 ハ 間 ハ 有 ハ 諸 ハ 大 ハ 衆 ハ 滿 ハ 二

十五里。王敕一臣持一油鉢經由過。莫令傾覆。若棄一滴。當斷汝命。彼遣一人拔刀在後。隨而怖之。臣受王教。盡心堅持。或人の云此油鉢の喻より

遊觀 文選云遊觀道德之域

優長 韓琬傳文軌云優長

遊民 家業多く依り食する志を捨て云曲礼云無曠土無遊民

融 左傳隱公傳云其樂也融融和也

悠 詩經黍離篇悠々蒼天注遠貌李白詩極目心

悠 韻會悠々閑暇貌俗云悠々悠々云

有餘不足 老子云天之道損有餘而補不足

有識 文選桓元子薦譙元彦表云有識之所悼心もの

たる半ありと云ふるがよりのくゆると云ふるものとも減と云ふ修く禁中此半ありと云ふる減と云ふ識と云ふは必しも然るべし

由緒 首楞嚴經云其各命由緒字書緒絲端也

勇健 唐書曰勇健非常通鑑宋文帝記云兄弟勇健これ

遊山 晋の郭文がより山水と云ふは此の遊山と云ふ今俗

不意 或率尔と云ふは此の不意也

勇士 孟子勇士不志喪其元

裕 孟子公孫丑篇一餘裕とあり今俗物の餘を

半とゆふと云ふは是

半とゆふと云ふは是

圓夢 ユメアハセ 山谷詩茶夢小僧圓 注南唐近事馮僕舉
進士有徐文能圓夢 或作原夢

女 第三十八

諺

命ハ義ヨリク輕

後漢書朱穆傳云。

情為恩使命緣義輕

名人ハ人トシテ 許魯齋云君子省己胡違毀以乎哉

目ヨリ鳥 地の鳥 幸々 文選張景陽雜詩

云人生瀛海内忽若鳥過目 古歎

よあはれなるひられておのれなるものゆゑ

家集云 目と云るをれをかくるゆゑ

盲者の杖と失ふ如 陳同甫集別公惘然若盲者失杖

盲者蛇よおぢり 古歎

あはれなるをひらけりてはかたじけなく

俗語

面目 史記項羽本紀羽云江東父兄憐而王我

何面目見之今云面目もさへいと云と同く

迷惑 史記范雎傳よび 韓文云開迷惑之曾

目巧 左傳僖公六年傳目巧。註縛兩手于後。惟見其面。禮記仲尼燕居目巧。注目巧謂不用規矩繩墨。

但據目力相視之巧也。

名譽 韓文行身陷不義。況望多名譽。

滅心 管子曰。禮義廉恥謂之四維。四維不張。國乃滅心。

牒 訟辭也。又目案と云。居家必用。注此文驗と考。

祭と云。案と云。目ハ半目也。今俗案と云。あし

和訓と加て目あて云也。

面談 通鑑唐高祖記。雖隔千里。皆如面談。

希見 日本紀神功皇后紀希見。史記項羽本紀。須臾梁希見。師古云。

史記項羽本紀。須臾梁希見。師古云。朏音舜。動目而使之也。眛亦同。以目使人也。公

羊傳文公七年。眛晉大夫。目成。楚辭九歌。云。滿堂兮美人。忽獨與余兮目成。

王逸註云。獨與我ナカシテ。眛而相親。成為親也。

めてれ。修後々云。思之神。窟穴のる。目と

出。今幸なる本と云。と云。ハヒミミ。縁也。と云。り

是。今幸なる本と云。と云。ハヒミミ。縁也。と云。り

是。今幸なる本と云。と云。ハヒミミ。縁也。と云。り

残る。くちる。せり。と云。ハヒミミ。縁也。と云。り

あり。くちる。せり。と云。ハヒミミ。縁也。と云。り

榮。雅。抄。世。中。あり。くちる。せり。と云。ハヒミミ。縁也。と云。り

あり。くちる。せり。と云。ハヒミミ。縁也。と云。り

あり。くちる。せり。と云。ハヒミミ。縁也。と云。り

あり。くちる。せり。と云。ハヒミミ。縁也。と云。り

こころ

諺

水一畫(二)如(一)一

觀經序分義云縱發清心猶如畫

水 又此の字れ部水にちり

又此の字れ部水にちり

水

方圓の器(一)一

孟子疏荀卿曰表正則影正盤圓

則水圓 孟方則水方 韓非子云為人君者猶孟也 民

猶水也 孟方水方 孟圓水圓 白樂天詩無情水隨方

圓器不繫舟任公住風

身よあゆみ

身よあゆみ

身よあゆみ

身よあゆみ

身よあゆみ

身よあゆみ

手垂珠 俗小留きと云珠ハ耳垂珠ありと云 陳希夷神

耳垂珠

相全編云耳厚而堅聳而長皆壽相也 輪廓分明聽

悟垂珠朝口者主財壽 貼肉者富足 耳薄如紙貧窮

無倚事文類聚別集云節度李忠臣因奏對德宗謂

曰卿耳長大貴人也 忠臣聞驢耳甚大龍耳即小臣

俗語

御方 欲以方れ字に字より 味方又因ホの字以

用ハ北之 古半紀仲哀紀の末ノ太子也方とあり

身一ろく 身一ろく 為初てか 深氏玉ろく 枕弟子も

みどりく 大後ろり 俗よまるとの記ろりく 未記ぬとむし

くといふは、の云はるる。未だくの字もや

微細 班固典引。昭明好惡不遺。微細。 汰華經云。譬如有經。卷書寫三千大千世界事。全

存微塵中。

未鍊 化章。未鍊の垢をけ換へり。俗法の未

練ハ本ハ果勸うとてり。

冥加 神の加護と云。或は冥と云。速修の成る。冥加冥感

同。速修の地他人の未知。及び神の格度。及び法

云。冥於加留。仁正。仁直。奈留於以。天本。登壽。又或曰冥

加ハ仏の。枕綱。及び

名利 莊子盜跖篇。子正為名。我正為利。名利之實不順。

於理不監於道。汰華經有二人號曰求名貪著利養。

正譌

笑作 誤。 鷓鴣 誤。 眉目 誤。 鷓鴣 誤。

之第四十

諺 知るといふこと。すくすく。

論語曰知之為知之。不

知為不知。是知也。

積善の家ハ餘慶あり。 易繫辭云。積善之家必有餘慶。

下。く上とて。ハ本。及び。 論語子曰不在其位不謀

其政。 誤。 新考。

仁者ハ敵ナシ。 孟子梁惠王篇云。仁者無敵。註。蓋古語也。

朱。ハ。赤。ハ。赤。 家語曰。丹之所藏者赤。漆之所藏

者黑。是以君子必慎其所與處。野客叢書曰。近朱赤。近

墨黑。見傳。玄太子箴。

十分ハ覆。 家語三恕篇云。孔子觀於魯桓公之廟。有

欵器焉。夫子問於守廟者曰。此謂何器。對曰。此蓋為

宥坐之器。孔子曰。吾聞宥坐之器。虛則欵。中則正。滿

則覆。明君以為至誠。故常置之於坐側。顧謂弟子曰。

試注水焉乃注之水中則正滿則覆夫子喟然嘆曰
嗚呼夫物惡有滿而不覆哉俗十分盈其十分八覆也此喻
慈悲ハ上よりくる顔氏家訓云夫風化自上而行於
下者也自先而施後者是也是以父不慈則子不孝兄
不友則弟不恭夫不義則婦不順也是讀の意も同く
十遍此言十遍又父の如くハ云子亦如のるハ云新考
九經每言讀書不如寫書高宗親灑震翰遍寫九經
又嘗御書光武紀賜執政徐俯曰卿勸朕讀光武紀
朕思讀十遍不如寫一遍
舌ハ禍の根 老子經云夫舌禍福之門
舌三寸の轉舌三寸の轉もく五尺の身と損す 此後多一を獲く
後をバ廻るも長ぐくと云さもくく之後と後く戒と
せり。三寸の舌ハ前漢書張良傳以三寸舌為帝王師

又鬻食其傳掉三寸舌下齊七十餘城靈樞腸胃篇ハ
五尺の力ハ孟子滕文公篇五尺童子乞童子の本ハ大
周礼考工記人身長八尺難經本義張翥序七尺之
軀この軀ハ八尺ハ考ハ今人の怒ハ不
する半之後ハ此周尺ハ考ハ今人の怒ハ不
を周尺の八尺ハと日ハの儀ハハ考ハ今人の怒ハ不
周尺の八尺ハ日本ハの曲尺六寸四分弱ハ當るハ
鹿と追ハものハ山ハとハハ淮南子曰逐獸者目不見
太山ハ者欲在外則明所蔽矣又云逐鹿者不觀兔
上戸本性ハとありハ文選傳武仲舞賦云漫既醉其
樂康嚴顔和而怡懌ハ幽情形ハ而外揚文人不能懷
其藻兮武毅不能隱其剛ハ注翰曰懷藏藻辭藻也
文人之醉不能藏其詩藻也武毅之人醉則不能
隱其剛勇ハ新考

芝蘭乃友 家語より出たり 此の字は於人を名づるの
友よりと云ふ事あり

麝香もくげハ腦より出る 麝の香もくげハ腦より出る

從蓉切不可就鼻聞蓋有微蟲 麝の香もくげハ腦より出る

七尺公て師の影と云ふハ 此流俗言より出たり。善見論云。弟子從

師行不得遠師七尺沙彌威儀經云弟子從師行不

得以足蹈師影 新考

知て云ふ 老子曰知不知止 新考

職敵 素書曰同執相規 異域同譚

俗語 斟酌 出于國語註云斟酌取也酌行也韻會云取

善而行曰酌山谷詩斟酌古今來治國班固典引斟酌

道德之淵源四書通義仁山金氏曰斟酌俗語也如以

勺取酒以入器而酌量其淺深也 是斟酌の字とも用ひらる

辭退の心より用ひらる 又或參酌の字とも用ひらる

後漢書張奮傳參酌秦法字彙云參酌審擇量度也

子孫 書經梓材篇より出たり

鹽 俗人のやびやうりとのあからしきみづのや

とが 居家必備釈常談云女人醜陋謂之無鹽

齊有醜女云 見于 劉向新序云齊有婦人極醜無

雙號曰無鹽女其為人也白頭深目長壯大節昂鼻結

喉肥項少髮折腰出胸皮膚如漆 又列女傳云故車より

出 後漢書伏湛傳より出たり

信向 後漢書伏湛傳より出たり

精進 漢書敘傳云召屬縣長吏選精進掾史註師古

云精明而進趨也又佛書にもいふ字多し 弘決云無雜

故精無間故進 是ハ本と勤と此本と云今潔身す

る本と精進と云 此書に云く初り精進と云を修むること

とあり 智度論云有二精進一身精進為小二心精

進為大於之の字いりし初也

紆 丁度集韻云克夜切以繩維持之也

失念 遺教經云若失念者則失諸功德注云失念謂

有始無終也圓覺經云得念失念無非解脫

初心 首楞嚴經云有無量辟支無學并其初心同來

佛所俗小初學の人と初心と云これより

成就 史紀呂后本紀より

殿 論語子曰孟之反不伐奔而殿註軍後曰殿漢書注

師古云殿之言填也謂軍後以扞敵倭俗小後驅と云此也

卷舌 漢書揚雄傳云礼官博士卷其舌而不談

舌長 詩大雅曰婦有長舌維厲之階朱傳云長舌能

多言者也足云多舌といひ俗よりてと云

助成 書經酒誥より

自滿 書經仲虺之誥云志自滿九族乃離

主君 左傳昭公二十九年より

臣下 伊訓曰臣下不匡

親父 父と親父と云り女子密と云り

親屬 前漢書馮野王傳上曰吾用野王為三公後世

必謂我私後宮親屬

祠官 神宗と司るものと云史記高祖紀より

洒落者 山谷云春陵周茂叔人品甚高胸中洒落如

光風霽月これ誠と云志の氣象と云云

一人より別く世情と云云と云ること云

上聞 漢書武帝紀積行之君子雍於上聞也師古云

言見雍退不得聞達於天子也

伺候 六韜云雞犬其伺候韓退之送木子愿歸磐谷序

伺候於公卿之門

自贊 史記平原君傳よむり

指南 古今註越裳氏來貢歸念其路周公與指南車至

其國轄鐵銷盡指車とて今世の磁針の類なり

万の者と云ふ半指む車の方角と知らるると云或く東京

賦幸見指南於吾子その指ぬと謝する詞也

如在 論語八佾篇よむり俗小人の疎略をりと云をすりと云

頌之或あり也神の指むるを多く見るの見事をさすなり

と云て也云りい成のをり人よ交りるをかく人よ見

互に如字とり今をさすりと云をすりるを疎略の

子細 物のこまりなる事之楊升菴文集卷之四十七云北

史源思礼傳云為政當舉天綱何必太子細也杜詩

野橋分子細俗語本此好古云杜詩亦云

醉把茱萸子細看

爾來 孔明出師表よむり

入木 和俗小字法と云く入木と云宋張懷瓘書斷云晋

帝時祭北郊更祝版工人削之筆入木三分云云云

之う事也云云りて字法と入木と云云る也

時服 西京賦云制衣為時服以適寒暑大學衍義補

云云五代舊制每歲諸臣皆賜時服

自由 後漢書五行志よむり

自在 杜詩恰ハ嬌鶯自在飛又自中自生と連用す

邪魔外道 朱子文集よむり

四百四病 人の病四百四病ありと云事也云事云千金方八

十二卷調氣法曰百病不離五臟共有八十一種疾冷

熱風氣計成四百四病又八十一卷道林養生第二云

將知四百四病身手自造本非由天

十死一生 漢書外戚傳より

柔弱 文子柔弱弱者生之幹也

濁穢 史李尋傳盪滌濁穢

鄙吝 後漢書黃憲傳より

生涯 杜子美詩爛醉是生涯

上根 傳燈錄六祖云汝師戒定慧勸小根小智吾

神妙 戒定慧勸上根上智人 易係辭云神也者妙萬物而為言者也俗より功

勞と有り戒礼儀云一其人をとりて神所なる事

時宜 俗ハ之をのりて云く

大漢書元帝紀不達時宜 曲礼云礼從宜又云礼時為

色代 代ハ易も也人と礼して教とを易するを教の

云く俗より人より礼をりて色代と云

白癡 左傳成公傳云周子有兄而無慧注所謂白癡

失墜 左傳弗敢失墜今俗より費の多き事と失墜と云

神異 家語云高辛生而神異

瞬息 杜詩云得失瞬息間

自然 老子云道法自然

縱橫 史記穰秦傳より從衡とあり杜詩群盜尚縱橫

質木 漢書地理志民俗質木師古云質木者無右文

飾如木石然

醜物 俗よりげすむるを云く

葦原醜男のりハ神也と云く

神と色弗大明神と云ハ神ハ神也と云く

上戸 其桃と云酒と飲ものと云く

不飲と云小戸と云

大夫 韻會曰周制以八寸為尺十尺為丈人長八尺故曰

大夫詩甫田註疏夫有傳相之德而可倚仗謂之大夫俗小

男子の健なりと云々と云えりなりて半均の倍なりと云々と云

邪見 佛書小父母の者なりと云々と云沙門と教せざるなりと云見

正見又曰正見邪見利根鈍根

現前常住 佛書の常住常住十方常住現前常住十方

首尾 居家必用曰首者始也尾者終也始なり終あり

習札 何れと云と云札式ある本と云白より習札 佛書

失札 何れと云と云半と云札式あり札式あり札式あり

旋滯 何れと云と云半と云札式あり札式あり札式あり

止動 修書と云と云札式あり札式あり札式あり

序 序文の書地の名ありありありありありありありあり

性體 法華經所謂諸法如是相如是性如是體

書札 漢書司馬相如傳注師古云札木簡之薄小者

也時未多用紙故給札以書今紙を用と云書札と云ハ

古名と改めると云云編殺者なりと云云

辭退 司馬長卿難蜀父老云遷延而辭退韻會曰說

文辭訟也又云辭不受也今人辭訟之字作詞言詞

之字作辭又以辭為辭受之辭又以辭為文辭之辭

循用既久今不廢者なりと云云

と云と云辭退と云書が本字也

と云と云辭退と云書が本字也

と云と云辭退と云書が本字也

と云と云辭退と云書が本字也

と云と云辭退と云書が本字也

と云と云辭退と云書が本字也

と云と云辭退と云書が本字也

と云と云辭退と云書が本字也

尋常庸人不釋。索隱云尋常以言其少也。今俗小人均の細多あるを尋常と云と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

裝束 柳州集即日裝束上道

受用 文山集一生受用忘非是

屍骸 蜀志葬其屍骸

掉舌 唐書掉舌以為不可。今俗も均と肯ぬふ女と掉舌あり

救免 宋史遇救免

差別 朱子文集云固無差別

社壇 元史張養浩傳後禱于社壇

進獻 元史安南傳當進獻

生々世々 南史王敬則傳唯願後身生生世世不復大

執權 南史載法興傳執權日久

宿老 北史源賀傳宿老元臣

宗旨 佛存の法也。五燈會元親受宗旨

自餘 邵康節詩云飽食高眠外自餘無所求。通

鑑齊和帝記自餘家財

殊勝 華嚴經海有奇特殊勝法

白 楊升菴云白字異訓。日光之白曰皞。月光之白曰皜。草

白 皎。男子之白曰皙。女子之白曰皤。老人之白曰皤。草

華之白曰葩。雪霜之白曰皚。鳥羽之白曰皠。

所詮 楞嚴經序考其所詮韻會詮字註晉書詮論謂

具說事理也。一曰擇言。一曰解喻也

始衷終 左傳云君子之謀也始衷終皆舉之。今之初

中後と云。乞治衷終と同詞。衷ハ中と同

旨趣 嵇康琴賦序覽其旨趣。注善云趣意也

至極 成公綏嘯賦音聲之至極。注翰曰至極謂極妙也

嫉妒 楚辭各興心而嫉妒。王逸注云害賢為嫉。害色為妒。

今浪々として女物抄々々あり半と疾ゆらり

潤澤 司馬長卿封禪文云。非唯雨之。又潤澤之。註銑曰。此

非唯雨也。則君之惠化所為潤澤也。又劉孝標廣絕交論

邀潤屋之微澤。孟子曰。若夫潤澤之則在君與子矣。今

俗小抱のまき半とほはたしとほはたの法と云々あり

修理 文選任彦升為下彬謝脩下忠貞墓啓より

失火 史記齊悼惠王世家より

強 酒と云ふると云ふ字也。孟子離婁篇云。是猶惡醉強酒

修羅 佛經小阿修羅帝釈と推と牽く修羅員の時より

日月と捉く。藕絲孔中より。帝釈自ら時を天文十と重

乃網中にかく等の説あり。天台文句疏記及名義集小

えり。俗小石門車と修羅と云。大石帝釈者お似り

阿修羅帝釈と動は義と云あり

神變 佛書よりかついての詞也。内より天ありてかゝる変動

これあると神変と云

自墮落 志堅固よりばくく自棄する人と俗より自墮落と云

釈氏要覽學者為四事墮落する目あり。下然の俗の涵

すると墮と云とは義よりあり

衆生 釈氏要覽祐法師云。衆共生世。故名衆生。禮記

祭義衆生必死

娑婆世界 釈氏要覽云。正云索訶。又自誓三昧經云。沙

訶漢曰忍。或云堪忍。此土剛強難忍。故即奉立名也

之遶 四書正解曰。道字从辵。省作之。凡之遶。放此。埃

囊抄より四遶とあるを誤なり

試筆 俗より策初より訶と化り字と書れと試筆と云。按

あり。歎湯永叔范文正公をど試筆れ訶ありと云

策首の化より。避菴訶集より丙午試筆訶あり。内

有園稿中七より試筆の訶あり。古より策首の化也

後世の偽りなりん
 順逆 杜子美詩云。人生半哀樂。天地有順逆。
 賞味 南史謝覽傳。武帝目送良久。自比仍被賞味。
 正譌 震動雷電 今指云々々々 無術 失却 手裏劍 弱
 赤脚 尿瓶 起 起 撞木 純熟
 體 儒者 旨趣 慈石 漢

諺草卷之六 終

諺草卷之七

比 第四十一

諺 貧の盗人 潜夫論曰。禮義生於富足。盜竊起於貧。

窮 漢書曰。民貧則姦邪生。

人ハ死て名と留め虎死て毛と留む 埤雅云。語曰。人死留。

名豹死留皮。故君子疾没世而名不稱焉。新考

人の口おそり 國語云。諺云。衆心成城。衆口鑠金。

史記鄒陽傳云。衆口鑠金。積毀銷骨。荀子云。傷人。

言甚於矛戟。況形紙筆乎。新考

秦世ハ虎狼と何なり 人の口を操るなり 後京極

人に舞さる 史記封禪書註。秦皇漢武為諸燕遷恠之。

士舞弄之。若偶然。後乃之。偶々人形の半。

人ハ一代名ハ末代 白氏文集云。遺文三十軸。軸金玉。

聲。龍門原上土。埋骨不埋名。歐陽公本論云。同乎。

万物生死而彼歸於無物者暫聚之形不與万物共
盡而卓然不朽者後世之名 本朝文粹云夫形者
百年之旅館也名者萬代之嘉賓也是亦より終るは後也
人の故として我身となり 論語子曰見賢思齊焉見
不賢而內自省也 後うふおつせむなる

人一癖 晉書曰王濟有馬癖和嶠有錢癖杜預有左
傳癖又王福時八思と卷る癖あり英魯虫よ香癖あ
り李愷と地癖あり李浩と竹の癖ありと也 欽

人至てかこころをこたへて友れ 家語曰水至清即無魚
人至察則無徒

人ハ名とわくく虎ハ毛を惜む なり人ハ多く名をわくく
人ハ善惡の友より 家語曰與善人居如入芝蘭之室
久而不聞其香即與之化矣與不善人居如入鮑魚

之肆久而不聞其臭亦與之化矣 是以君子謹其所
與與虎也 氣誘のこころお同し 新考
人喰馬も合口 は後のまをるの蹄嚙をるころ 能

これと別るく志有り 故也 法を氣に合
志ありと論より 呂氏春秋曰人有臭者其親戚兄弟
妻妾無能與焉自若而居海上人有悅其臭者晝夜
隨而不去これ實之同方の譚也

人と鏡と 墨子曰君子不鏡於水而鏡于人鏡於
水則見容之面鏡於人則知其吉凶 唐書曰魏徵薨
太宗臨朝歎曰以銅為鑑可正衣冠以古為鑑可知
興替以人為鑑可明得失朕常保此三鑑內防已過
今魏徵逝一鑑亡矣

人事いづく目代おけ 龍城錄柳宗云俗諺云白日無
談人談人則害生 昏夜無談鬼談鬼則怪至 氣誘

のこころは同じ。滅し漫し人の失と後りうんハ禮の公る
半堂と云ふ。さうして又いふふびく目代からん
もいふふびく。早考いふふびく。あつたを
らばん。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
くろハ主人の心。あつたを。あつたを。あつたを。
人事いふふびく。あつたを。あつたを。あつたを。
まのつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
日。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
影。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
その論。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
り。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
幸。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
日暮道遠。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
施。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
比翼連理の契。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。

のこころは同じ。滅し漫し人の失と後りうんハ禮の公る
半堂と云ふ。さうして又いふふびく目代からん
もいふふびく。早考いふふびく。あつたを
らばん。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
くろハ主人の心。あつたを。あつたを。あつたを。
人事いふふびく。あつたを。あつたを。あつたを。
まのつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
日。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
影。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
その論。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
り。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
幸。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
日暮道遠。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
施。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。
比翼連理の契。あつたを。あつたを。あつたを。あつたを。

羊はあゆむ。摩耶經偈云。譬言如旃陀羅驅羊就屠
所歩と近死地人命復過是屠不と多畜を屠り教
不也。羊と殺さん。屠不と多畜を屠り教
作不。屠不と多畜を屠り教。人の命と屠不と多畜を屠り教
羊の如く。屠不と多畜を屠り教。人の命と屠不と多畜を屠り教
後拾り。屠不と多畜を屠り教。人の命と屠不と多畜を屠り教
隙駒。史記魏豹傳。人生一世間。如白駒過隙耳。索
隱曰。莊子曰。無異騾驢之馳過隙。則謂馬也。小顏曰。
白駒。謂日影也。隙。壁隙也。以言速疾。若日影過壁隙
也。莊子知北遊篇。如白駒過隙。文選劉孝標書。
隙駒不留。李善曰。墨子人之生乎地上。無幾何也。譬
之猶駒而過。郊。古隙字也。李周翰曰。隙。穴也。駒。馬
馳而過。穴。喻速也。
城。可。ひ。了。出。る。病。より。も。さ。い。く。け。う。た。い。の。表。は。わ。い。ら。る。か

ひきこり水鏡論語子貢云紂之不善不如是之甚也

是以君子惡居下流天下之惡皆歸焉是流之也

秘事ハ睫の如く 睫ハ目の側にあれ凡そざるごとく世ハ秘

偽と云ふも亦てハ此の本なり 勿れハ心づるごとく

云々なり 韓非子曰知如睫也能見百歩之外而不自見

其睫是流と語勢亦似たり 新考

貧ハ病より若く 文選曹顔遠感舊詩云富貴他人合

貧賤親戚離

畫す子ハ父ハ似る夜生者類母孔子家語亦育

者類又夜生者類母此語ハ新考 大戴礼云畫生

笑女ハ悪女之仇 說苑尊賢篇趙簡主語曰夫美女者醜

婦之仇也盛德之士乱世所疏也 正直之行邪枉所憎

也 史記諸先生曰女無美惡入室見妬士無賢不肖

入朝見嫉美女者悪女之仇豈不然哉

美人の修を様とする 太平廣記唐代宗の廣德年

中ハ弥怏といふもの洛陽ハ好むと云ふ袁氏

の女の形うらうと云ふと云ふ 要て書と云ふ 十一年

ひく二人の子と云ふ 後弥怏安よつて長安ハ約

ト書れ袁氏とつれけり 端州と云ふと云ふ袁氏云

けるハ巴邑の江の瀕ハ峽山寺といふと云ふ 其の俗

と云ふと云ふ 此の度ハのちハゆんと云 弥怏

男ハのちハつれけり 袁氏悦むと云 俗の房ハゆと

云 俗ハこれと云ふと云 俗ハこれと云 俗ハこれと云

と云 俗ハこれと云 俗ハこれと云 俗ハこれと云

と云 俗ハこれと云 俗ハこれと云 俗ハこれと云

と云 俗ハこれと云 俗ハこれと云 俗ハこれと云

恩情 役此心 不知 逐伴 歸山 公長 嘯一聲 烟霧 深

書終く弥帳く分ふ是より長く引くしてきて。是より衣
 裳と引され。兜くを帳とす。本のよき。はより。る。
 弥帳。弥帳。さる。げ。ま。を。魂。と。共。ふ。ち。り。く。わ。り。て。を。借。
 る。さ。る。を。借。む。り。と。さ。ひ。出。し。て。流。り。り。り。を。借。借。沙。
 此の対は帳とす。玄宗の元年中。高力士は。ち。よ。来。
 り。帳のさ。り。ま。と。ん。く。借。と。ひ。く。帳。よ。く。ま。あ。り。
 玄宗よ。なる。玄宗これと上賜。ま。い。ひ。あ。り。け。し。其。
 後。あ。れ。が。礼。の。帳。の。ゆ。え。と。さ。り。ひ。く。穿。し。今。日。あ。り。
 う。び。その。後。く。わ。ひ。く。あ。や。ま。と。ん。け。し。は。環。玉。環。
 襟のく。ひ。く。思。至。く。地。の。り。と。云。弥。帳。の。り。く。う。り。く。
 船。と。舩。と。作。り。て。俗。の。
 この。怪。り。と。作。り。て。俗。の。
 俗語 披露 後漢書蔡邕傳云披露失得 首楞嚴經
 生滅根元從此披露 今り。詞。の。心。と。次。く。人。よ。ん。ひ。り。

す。い。つ。う。ひ。く。ま。あ。り。り。り。と。ま。あ。る。ま。あ。る。一。誤。て。は。上。
 一。と。地。と。云。は。く。と。と。披。露。と。云。は。遠。く。り。

尾籠 埃囊抄。尾籠と云。詞。の。意。非。天。皇。の。神。祇。は。此。
 末。の。く。ゆ。り。一。取。捨。の。尾。す。一。ま。や。ら。な。れ。と。か。く。終。ん。

ふ。め。は。袋。束。ま。裾。と。り。ま。の。と。ゆ。り。て。これ。を。引。て。か。尾。袋。
 から。一。引。く。或。時。引。ゆ。あ。り。一。小。内。約。り。ま。裾。の。内。よ。り。し。を。
 ち。く。で。障。ふ。ま。ま。こ。あ。り。り。は。天。皇。尾。籠。なり。と。宣。ひ。り。
 より。尾。籠。と。云。詞。始。ま。り。と。り。り。は。後。性。宗。不。經。論。の。り。
 一。一。は。滅。く。靴。笑。さ。り。一。世。う。り。日。記。第。十。一。に。述。
 天皇の。衣。一。一。干。古。と。云。詞。あり。是。ハ。俗。と。さ。る。もの。と。こ。
 ぐ。す。一。な。ま。く。今。の。世。を。云。詞。の。ま。なり。干。古。と。新。日本。紀。の。
 尾。籠。也。と。云。それ。と。考。へ。こ。あ。り。て。び。ろ。う。と。云。なり。

貝。頭。肩。 文選張平子西京賦。巨。靈。貝。頭。肩。注。薛。綜。云。作。力。
 之。貌。又。向。曰。用。力。之。貌。集。韻。壯。士。作。力。貌。肩。亦。作。貝。頭。

俗人といひいさむる云ハカト化して一味ありさしや
俗人のこと来。又ひさのよ
り云。易。原の字なり

百死一生 通鑑綱目第三十九卷に在
百死一生 通鑑綱目第三十九卷に在

一撮 漢書律歷志に云。注撮三指撮之也

卑下 漢書云。卑下士卒

便宜 史記蕭何傳に云。便宜

秘藏 漢書劉歆傳。陳發秘藏。圓覺經云。為諸菩薩

開秘密藏。涅槃經云。愚人不能解。謂之秘藏。智者了達。則不名藏。

憑虛 東坡赤壁賦。憑虛御風。今俗に其のふき半とい

畢竟 范魯公戒從子杲詩。小學嘉言載之。云。執位難

久居。畢竟何足恃。陳選注云。畢竟終也。今俗に其の

論百物各可蓄一也

被官 職原抄に附屬の友と被友と云。そ人よりけり友

穢と被るは義也。或友の組子よりけり。八指右被友あり

彼是 俗に物と被ると被るを被と云。されは是は被る

埃囊抄曰。人と被るとむしと被ると云。ハ藤侍の字也。千字文

特已長と云。とけて沈と云。されは字義中なり。彼とも

乞とも被る。被乞と云なり。

一入 周礼考工記。三入為黹。五入為緹。七入為緇。善相

公意見封事云。漆油一入。二人之紅。

一花 俗に花あり。被るを半と一むと云。源氏寄本に云。

非愛 俗に危路に除て積るを逃る事と化也と云。或

曰。法天命終人とする時。みの死ねと現る。乞と天人の又衰

と云。俱舍。舉小五衰大五衰之別。曰。一衣服。嚴具出。非愛

字仲徳

毛

諺

燃る火は薪 帝範云。惡火之燃。添新。望止其

門に... 神代卷云。諸神噴素戔鳴尊曰。

汝所行甚無賴。故不可住於天上。亦不可居於葦原。

中國宜急適於底根之國。乃共逐降去。于時霖也。素

戔鳴尊結束青草。以為笠蓑。而乞宿於衆神。衆神曰。

汝是躬行濁惡。而見逐。識者如何。乞宿於我。遂同距

之。是以風雨雖甚。不得留休。而辛苦降矣。自爾以來。

世諱著笠蓑。以入他人屋內。又諱負束草。以入他人

家內。有犯此者。必債解除。此太古之遺法也。新考

門前市と云々 漢書鄭崇傳。上責崇曰。君門如市。人

何以欲禁。切主上崇曰。臣門如市。臣心如冰。

と云々 四百餘州 便用全書第一云。光武中興仍

併省郡國十縣道侯國四百餘所 千歲寶掌和

尚詩云。行盡支那四百州。此中偏稱道人遊。新考

紅葉の妹 大平廣記云。唐德宗の時に於て云々の

沙溝深中のの下の流るる水にて一の紅葉をむらふ所の書付

と云々 流水何甚急。深宮盡日閑。慙慙

謝紅葉。好去到人間。于祐列又一の紅葉を頌して云。

曾聞葉上題紅葉。詩寄阿誰乞。と云々 此海の

水上より流るる水。文女韓夫人これとむらふ後。于祐の

韓詠し。文人と称して。其門下小とり。自ら詠く。帝阿

まの文女と追好されけり。韓夫人と云々 韓夫人の

韓詠同姓のよきと云々 于祐の書に。珍れの

時。韓夫人の紅葉を乞ふ。韓夫人の書に。今日妹

人として。韓夫人笑て。韓夫人の書に。一聯

「あり死な生きたる」目。信得て尿と洗ふと洗浴
と云。常々湯洗ひくは乃水と云。乃水を尿と洗ふ
る。火藏つて入戒品持妙香水灌洗既已
物怪 信ふ此方のあると物怪と云又俗人の大よ多る
半成りぬらうと云えと云均怪なり
熟 万葉集の刊く已が熟し一なる人の衣衣下之
よ

万葉 万葉集の刊く已が熟し一なる人の衣衣下之
よ

勿論 修し空海なりと半紙勿論と云海公格也
ろあ人の目小すなりとあり。ろあ人の勿論也。今
し勿論れと云

目禮 書叙指南曰顧視其人曰嘗目礼焉

年 牛聲 說文牛鳴象其聲氣从口出也 韓愈詩推

肥牛呼年

問訊 僧祇律云禮拜不得如痴年當相問訊僧史畧

云如比丘相見云不審謂之問訊僧のねをて一
記右と問と問訊と云

諺

聖人に及なり

淮南子曰夫聖人用心枕性依

神相扶而得終始是故其寐不寤其覺不憂讀くよ虫

莊子曰古之真人其寢不夢其覺無憂新考

千日の勤學より一日の名匠 揚子法言曰務學不如

務求師師者人之模範也 桓譚新論云三歲學不

如三歲擇師矣讀くよ虫の誤より

善悪を友とせんよ 史記云馮唐傳語曰不知其人視其

友を吾友とせんよと云云新考

千里の馬あれば一人の伯樂あり 韓退之雜說云世

有伯樂然後有千里馬千里馬常有而伯樂不常有

前車の覆は後車此戒 史記賈誼傳前車覆後車戒

千石万石と食一杯 韓詩外傳曰北郭先生妻曰結

駟列騎所安不過容膝食前方丈所耳不過一肉之

味 德清老子經解曰諺語有之羅綺千箱不過一暖

食前方丈不過一飽 趙清獻公座右銘云良田萬頃

日食二升大廈千間夜卧八尺乞ホテ漢の

小利大損 說苑敬慎篇云小利大利之殘也 論語

見小利則大事不成

俗語

穿鑿 漢書礼樂志より出たり 東坡文集王荊

公之學穿鑿至此字彙より穿委曲入也 鑿穿孔也 乃

理其まぐさくする事と云まぐさくする管と云 汝秋の

をさくする事と云 穿鑿の字と云

刹那 俱舍論云時之極少名曰刹那

專一 史記孝文本紀より出たり

憔悴 孟子公孫丑上篇より出たり

成人 人の生長ありと成人と云來漢書孔光傳よりあり

饒 俗語地の多きを事とせしむと云ハハ字あり 說文云飽

也。一云多也。或穰字とも用ひし。古くも

切磋琢磨 詩經より出たり。骨角と治るとの。既刀鋸とい

て切く後鑿錫といひくこれと磋く。玉石と治るとの。推

斫角 前漢書五鹿充宗傳より出たり。朱雲といふ鹿充宗と

斫檻 漢書朱雲傳より出たり。朱雲はよく成帝に諫言し

消息 易經剝卦云。君子尚消息盈虛。豐卦云。天地盈虛

消息 消息の字と用ひ。漢書主父偃傳。明主不惡切諫。

與時消息 註消息謂進退。○禮記月令消息註云。陽

生為息。陰死為消。廣韻云。消息音信也。文選李善注

云。消言往也。夏既往。故消息言來也。使无所求。故曰

息也。今書札と消息と云。注來の意と。又考証の義

と。消息と云。又書札のころは。供養は來り

先日 史記鄒陽傳。吾先日敢獻愚計。

濟 詩經大雅。濟く多士。注多貌。

善根 彌陀經。不可以少善根。

道遙 漢書韓安國傳。夫盛之有衰。猶朝之必暮也。周禮地官云。戰功曰多。後冷泉院の古宇。源補。舟の出入り。海難致

齊頼 後冷泉院の古宇。源補。舟の出入り。海難致

身と感じ。凡人たゞ事とおして。何因の産ある事を知。中
よ色と云ふ。うて。こと。を。知。る。能。は。る。を。知。る。能。は。る。の
を。知。る。能。は。る。の。事。と。して。自。れ。と。知。る。能。は。る。の
と。知。る。能。は。る。の。事。と。して。自。れ。と。知。る。能。は。る。の
と。知。る。能。は。る。の。事。と。して。自。れ。と。知。る。能。は。る。の
と。知。る。能。は。る。の。事。と。して。自。れ。と。知。る。能。は。る。の
と。知。る。能。は。る。の。事。と。して。自。れ。と。知。る。能。は。る。の
と。知。る。能。は。る。の。事。と。して。自。れ。と。知。る。能。は。る。の
と。知。る。能。は。る。の。事。と。して。自。れ。と。知。る。能。は。る。の

正載 風俗通曰。千生萬。く生億。く生兆。く生京。く生
紳。く生孩。く生壤。く生澗。く生正。く生載。く地所不能
載也。算法のりりく。正載。く正時。く正成。く正本。く正
世智便 下學集世智便。世俗恪惜之義也。沙石集小
浴湯。く或。世房。世る。さ。く。く。世智。文。能。を。り。あり。は。字

佛書。く。あり。所謂。偏智。權智。小智。世智。便。聰。り。く。ま。の
智。を。系。統。平。等。觀。察。成。作。これ。と。佛。心。の。口。智。と。云

僉議 居家必用註。謀之於衆曰議。又曰僉議。謂咸其定
議也。書傳云。議皆言衆人舉之也。もろく。あり。ま。り。て。半
と。名。く。び。も。ろ。く。と。僉。議。と。云。字。彙。僉。皆。也。咸。也。衆。共。言
之。也。議。謀。也。評。也。定。事。之。宜。也。又。詮。議。の。字。と。も。用
了。詮。字。彙。評。論。事。理。也

漸 漢書江都王建傳。く。あり。師古云。籍。く。誼。貽。之。意
志。の。字。の。部。所。詮。の。系。下。に。く。く。く
法華經。漸。く。積。功。德。韻。會。漸。進。也。事。之。端。先。觀
之。始。也。增韻。事。之。由。來。也。俗。く。半。の。や。く。す。く。ま。る。と

先達 宋之間詩。寄言全盛紅顏子。須憐半死白頭翁
文選。庾元規讓中書令表。位超先達。註。先進之人

今俗山外の去志と先志と云

拙者 潘安仁閑居賦序より。朱子文集より自称して

拙者といふ。今俗自称して拙者と云拙者といふは

静謐 嵇康琴賦より。注善曰爾雅曰謐静也

世界 四方上下の界畔あるより。ハ世界と云ハ

成敗 國と治る政及と成敗と云成も即成也敗も覆敗也

晋平とを助成也平とハ覆敗より。成敗と云云

今とある人と教はと成敗と云ハあやまら

制度 史記薛宣傳云。明立文法。練習制度

寸第四十四

諺

過るるハ根不吸ガム

論語先進篇。子曰過猶不

及

水魚の習ひと云ハ 三國志諸葛亮傳云先主遂詣亮

凡三往乃見因屏人與計事善之於是情好日密関羽

張飛等不悅先主曰狐之有孔明猶魚之有水也願

勿復言及稱尊號以亮為丞相ハ亦亦小より今も人の

交むる事と云ハ水魚の思ひあはると云

雀の子存鶴の一羽 漢書鄒陽傳曰鷓鴣鳥繁百不如

一鷓 孟康曰鷓鴣大鷓也如淳曰鷓鴣鳥比諸侯鷓鴣

比天子師古曰鷓擊之鳥鷹鷓之屬也 漢は強より

俗語

産業 史記蘓秦傳より出より 漢書高祖紀云不

能治産業

吹嘘 書言故吏云求薦舉曰尚借吹嘘之力杜詩願借

吹嘘送上天。俗人推奉の字と用ゆ

赤赤ト 漢志赤地千里。南史其家赤貧。字彙云空盡無物

曰赤俗人すきとく云詞也

徒跣 礼記喪則徒跣

數奇 史記李廣傳云大將軍陰受上誡以為李廣老

數奇毋令當單于。唐高適詩丈夫窮達未可知。看君

不合長數奇。物ありて偶ありと耦と云。一ありと奇こ

云。教ハ命教ハ。李廣が命教奇とて耦合せん可し。遇

ざりと云。偶ハ偏也と教奇と云この義とされり。此ハ

樞機 易係辭云言行君子之樞機

繩 說文云以繩有所懸也。或作絲。左傳夜繩納師

垂迹 摩訶法師維摩經序曰非本無以垂迹。非迹無以

顯本。迹雖殊而不思議一也。叡山の傳教。高祖の弘法

等弘法と云。此乃今也。胎元金剛のお界と陰陽小

此と云。此ハ一神水波の別と云。此ハ迹の辨説と云。

と云。摩訶法師所謂本ありと云。これを迹と云。本あり

迹ありと云。これを本と云。本ありと云。一也。

匹如 野槌曰白氏文集偶吟詩。眼下有衣兼有食心

中無喜亦無憂。匹如身後有何事。應向人間無所求。

静念道經深閉目。閑迎禪客小低頭。猶殘少許雲泉

興。一歳龍門數度遊。沙石集第四。此乃と云。載曰。匹如

と云。人の一物と云。一物と云。行兒也。下而と云。此と

と云。願向ハ足ありと云。一物も貯一匹が也と云。

此ハ一物も貯一匹が也と云。一物も貯一匹が也と云。

此ハ一物も貯一匹が也と云。一物も貯一匹が也と云。

此ハ一物も貯一匹が也と云。一物も貯一匹が也と云。

此ハ一物も貯一匹が也と云。一物も貯一匹が也と云。

すのの皮とありぬと云せらるりぬれは俗に名をいふ事
無入望 日本紀の列あり

衰微 史記周本紀平王之時周室衰微

濟 韻會曰濟通也爾雅成也又事遂也借均等と云

入風 清く 心の潔と云 神代卷より

入風 清く 心の潔と云 神代卷より

諺艸卷之七 大尾

書諺艸後

元祿己卯之春 先生疾病秋又大
病有日而愈矣於是諺艸之稿成厥
冬病再發踰年焉今茲庚辰厥病弗
瘳仲夏念三日 先生三十有七歲
壽終正寢當時嘗命小生曰予齡未
及四十故多編次雜篇恐不免識者
之誹議然予志非止于此姑欲便後
生童樨之記覽而已齡過強仕學業

稍熟則欲補著經翼俗解之類庶乎
有小補于后學是平日之志也矣故
經解之所豫輯半成之遺稿亦有焉
惜哉未見其成也嗚呼可嘆哉小生
歲未滿弱冠且凡庸之才何得成
先生之美也恭記先生平日之志
與所見命小生以附其後聊述鄙衷
云

元祿庚辰七月望日

門生遜齋上野惠迪謹書

稍熟則欲補著經翼俗解之類庶乎
有小補于后學是平日之志也矣故
經解之所豫輯半成之遺稿亦有焉
惜哉未見其成也嗚呼可嘆哉小生
歲未滿弱冠且凡庸之才何得成
先生之美也恭記先生平日之志
與所見命小生以附其後聊述鄙衷
云

元祿庚辰七月望日

門生遜齋上野惠迪謹書

元祿十四年辛巳春正月吉旦

皇都二條通

上島瀨平

長尾平兵衛

仝梓

文政元戊寅冬十月廿九日寫訖元本好喜
湖澤先人之遺藏書也

文政二衣更着七日表紙出來

中村萬景道

